

初等教育の現場から理事長に就任して

宮崎 隆一

学校法人西南学院理事長

2022年12月理事長に就任して以来1年余り。その年の3月までは、同じ学院内の西南学院小学校の校長を6年間務めていた。西南学院小学校は、2010年に開校した西南学院で一番新しい学校である。福岡市内の公立小学校で32年間働いた後、開校1年前に小学校設置準備室に赴任し、教頭を経て校長に就任したが、初等教育出身の理事長は珍しいのではないだろうか。小学校での経験を振り返りながら感じていることを述べてみたい。

公立の小学校では20年間担任をしたが、そのうちの12年間は高学年の担任として過ごした。その間、子どもたちのさまざまな問題行動に直面したが、家庭環境の厳しさによる心の荒みや学力の遅れなどが原因と思われることが少なくなかったものの、そうとは思われないケースもあり、対応の難しさを感じるものがしばしばであった。小学生も高学年になると頭ごなしの叱責や指導では通用しない。子どもと向き合い、言い分を聞きながらも自分の言動を振り返らせていく

わけだが、「なぜしてはいけないのか」「どうすべきなのか」と話を深く進めていくと、単にルールということだけでなく、自分を越えた存在ということについて触れざるを得なくなる。しかし、公立学校においては、それ以上具体的に話すことはできず、もどかしさを感じていた。

西南学院は、創立者C・K・ドージャーの遺訓である「西南よ、キリストに忠実なれ」を建学の精神としているが、小学校ではL・K・シート第16代院長によってそこから導き出された4つの「Life, Love, Light, Liberty」小学校では発達段階を考慮し「Peace」と置き換えている）を教育の基盤に据えている。設立に関わった方々や前校長の思いや願いを引き継ぎつつ、小学校という人格形成期に神を知ることの大切さを「高い知性や理性とともに畏れを知る心を育てる」という言葉で発信してきた。この言葉は、旧約聖書の「汝の若き日に汝の造り主を覚えよ」「主を畏れることは知恵の初め」をもとにしているが、このことに関して、当時学院内

の広報誌に次のような一文を寄せている。(一部を抜粋)

「現代社会は日進月歩で技術が進み便利になつてきました。しかし、そのことがただちに私たちの幸福につながっているのかは疑問に思います。技術が進むことや便利になることが目的化してしまい、それらを手段としてどのような生き方や社会を目指すのかということが欠落してしまつている、言わば『哲学なき社会』になつていような気がしてなりません。自分たちが考へていることや行おうとしていることが本当に正しいことなのか、ときには立ち止まり見つめなおす謙虚さが必要だと思ひますが、自分を越えた存在を意識し畏怖の念をいだくとき、私たちはそのような謙虚さをもつことができるのではないかと思ひます。子どもたちにはぜひそのような大人になつてほしいと願つています」

社会の変化と価値観の多様化がますます進み、何が正しいことなのかも分かりづらくなつてきている現代社会においては、一人ひとりが

精神的な基盤をもつことが重要ではないだろうか。自分自身を振り返つてみると、一人の友人と、足尾銅山の問題に取り組んだ田中正造を通じて聖書と出会い、そのことが未だ脆弱なものではあるが精神的基盤と言へるものの形成につながつていったと思つている。無論、聖書だけが精神的基盤の形成につながると言うつもりはない。ただ、出会うことによつて人間は成長し人生も変えられていくということは言へるのではないかと思ふ。

大学時代は多くの出会いの機会に恵まれていると言えよう。そこでどのような出会いからどのようなことを選びとるか、学生本人が決めることだが、普遍的な価値観に基づいたもののみならず、建学の精神に基づいた独自の「善き出会い」を提供することができる私立大学の果たす役割は大きいと思ふ。文系理系を問わず、学びの対象の奥にある深遠なるものに一人でも多くの学生諸君が出会うことを願う次第である。